

ピアノ学習の新時代



小田直弥助教

探究心旺盛な小中高生の皆さんに向けて、弘前大学の先生たちのユニークな研究を紹介するこの連載。今回は、科学研究に基づく「ピアノ奏法」とその指導についての研究です。「ピアノは特別な才能がないとできない」は間違い！

きれいな音色を奏でるピアノリストやアーティストを見ると、指さばきもしなやかで、ついついうっとりしますよね。皆さんも、ピアノが上手に弾けたらなあと思いませんか？

ピアノは「特別な才能がないと上手に弾けない」と思われがちですが、自分の身体に合った弾き方や練習法に

新しい指導法確立へ

「ピアノは特別な才能がない」と思われがちですが、自分の身体に合った弾き方や練習法に

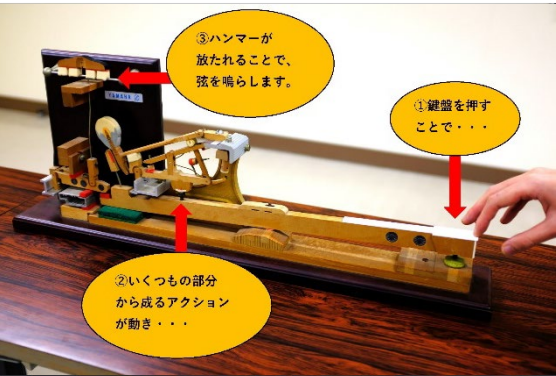
取り組むことで誰でも上達できるようなイメージ通りの多様な音色を実現するポイントとは「身体の使い方」と「ピアノの構造」

私たちの身体は、それぞれに手の大きさや筋力、筋肉の敏捷性などが違います。ゆえに、人によって身体の動かし方で得意なことと不得意なことも違います。

演奏を上達させるには、ピアノの構造を理解することが不可欠です。ピアノの鍵盤はピ



イラスト・弘前大学教育学部 ひつじ玲法



ピアノの音が出る仕組み

③ハンマーが放たれることで、弦を鳴らします。

①鍵盤を押すことで・・・

②いくつかの部分から成るアクションが動き・・・

演奏科学の研究を踏まえたピアノ指導法の研究をしています。

演奏科学の研究が進んできたのはおおよそこの30年で、また新しい研究分野です。ピアノ演奏時の効果的な身体の使い方などが徐々に解明されており、練習方法によっては、手や脳の故障につながる可能性も分かっています。

こうした研究の進歩から、学習者はピアノの練習方法や学び方を直し、指導者は新しい指導法を確立していく必要があると小田先生は考えています。この研究によって、今まで弾けないと思っていた曲が弾けるようになる、そんな未来が近づ

最後、小田先生からのメッセージ

優れた先生の助言と同じくらいに、私たちの身体やピアノの構造、物理などの知識がピアノ演奏に役立ちます。そうした知識はピアノ演奏時に効果的な身体の使い方を学ぶ土台となり、土台がしっかりすると、必ずしもピアノ演奏に特別な才能が必要ではないことがお分かりいただけると思います。弘前大学で私以外にも音楽や音楽学、音楽教育学の素晴らしい先生方と一緒に幅広く音楽と教育を学び、音楽に携わる先生を目指しましょう。将来授業をする立場になったとき、みなさん



の奏でるピアノの音が、子どもたちを素敵に音楽の世界に連れていってくれることを願っています。

第17回の先生
小田直弥助教
「教育学部音楽教育講座ピアノ研究室」
研究のなしてをご紹介！

ひろだい探偵団では、引き続き本学の先生たちの面白い研究をご紹介します。また、これまでの記事のバックナンバーも是非ご覧ください。左の二次元コードからどうぞ。次回の掲載は2月6日、「住民が地域づくりのプレイヤー(仮)」の「なして？」をお伝えします。お楽しみに。(担当：弘前大学研究・イノベーション推進機構、ライター：人文社会科学部3年 北島実里)

ひろだい探偵団

「あなたの「なして？」を科学で解明します」

((17))

※この画像は、当該ページに限り陸奥新報の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。 令和5年1月9日 陸奥新報掲載